

# 津山藩改政一揆

宇治清子

## 第一 改政一揆の背景

### 一 作州における一揆の伝統

作州に起つた一揆は慶長八年をはじめとして、延宝元年から明治六年に至る約二百年間に、黒正巖氏の調査によれば暴動となつたもの十回、暴動に至らず折衝の結果平穩に終結したもの二回、將に勃発せんとして起らなかつたもの一回、逃散二回、打ちわし一回計十六回となつてゐる。又この後の調査では二十余回に達してゐる。<sup>(3)</sup> それではこの小さな山国に何故二十回余に及ぶ一揆が起つたのであろうか。黒正氏はこれを「自然条件と作州地方の農民の由来血統である」と結論してゐる。<sup>(3)</sup>

血統論は論外としても、<sup>(4)</sup> 作州地方の苛酷な自然条件による凶作、生産力の低位性が一揆の原因の一つを為していることは否定できない事実である。しかし「封建的生産様式の下において不可避免的な本質的な帰結で潜在的に不断に存在し、周期的に繰り返される」と云われるように、<sup>(5)</sup> 当時農村において凶作はほとんど恒常的な現象であり、これだけで一揆の条件とはなり得ない。慶応二年までの一揆を通じてその原因を探つてみ

ると、凶作による困窮、年貢の收奪、役人の非違、米価の高騰等が主な原因となつてゐる。又作州には幕領、預所、他国大名の支配所が複雑に入り組んでおり、<sup>(6)</sup> その上度々の領主の交替・所領の増減が行われ、民心は不安定であり、支配統制は行われにくかつたことも原因の一つに数えてよいであろう。作州の一揆を通じて最も大規模な一揆であつた山中一揆の歎願文によれば、年貢附加税・未進米の免除、庄屋裏判借米の棒引等が要求されている。この一揆が山中という山間部に發生してゐること、又川筋の特権商人と藩の結託による米の川下げが行われようとした事実、村役人・特権商人等が襲撃され米を奪われていること等に見られるように、<sup>(7)</sup> 藩権力と農民の対立のほかに特権商人の存在が農民との対立を惹起してゐることが指摘される。しかもこれは単に経済的要求のみでなく、領主の早世により幕領になると知るとすぐ幕領の租率との差額の返還を要求し、更に藩から出された米切手を富農を襲つて現米に変えるなど、政治的機敏さと視野のひろがりを示してゐることが注目される。<sup>(8)</sup> こうした点で、山中一揆は改政一揆の祖型を為すものとも云え、こうした一揆の輝かしい伝統の上に改政一揆は果敢に戦われたのであつた。改政一揆においては、これまでの一揆の原因となつた諸条件はますます悪化し、連年の凶作に加えて米価の高騰、年貢收奪の激化、商品経済の浸透による農村内部の対立等により、まさに一触即発の状態となつてゐた。

これに加えて、作州の一揆において最も特殊な形態として注目されるのは、非人の問題である。作州の一揆のほとんどが「非人騒動」の形態をもつてゐる事実は何を意味するのであろうか。非人とは封建的身分制度にあつてはエタの下に位する最下層の賤民であるが、<sup>(9)</sup> この場合非人とは所謂野非人としての乞食・浮浪人を意味してゐる。<sup>(10)</sup> 作州の一揆におい

ては百姓はすべて簑を着けあるいはこもをかぶり、頼かぶりをした非人姿に身をやつし、手には鎌、竹槍等を持つて出て来る。勿論彼らは本当の非人ではなく普通の農民であるが、元文の頃凶年に際して勝北地方の農民が非人姿で、村々の富農に米を乞うて歩いたのが事のはじまりと考えられる<sup>(11)</sup>。勿論、乞うと云つてもこれは強請であり、非人姿となつたのは自らを非人と称することによつて、藩からの処罰を回避する口実としたものではなからうか。こうした非人騒動が度々行われた結果、慶応二年の一揆に至つては直吉らが加茂谷で農民達を集める時、たゞ「非人が出た」と云うだけで、農民達はすぐ強訴と察し非人仕度で出て来るほど、作州の農民にとつて非人という言葉はもとの身分的な意味から離れて、身近かなものになつて来ているのである。それと同時にこの非人という言葉で表わされる意識も、その間に変化して来ていることが察せられる。

たとえば倉敷に押かけた非人達、森元惣十郎宅へ打こわしに押し寄せた時、森元が用意の酒飯を差出したのを見て「いかに非人とは云え、お前如き極悪人の助けにあづかるいわれはない」とそれをひつくりかえし、店も屋敷もみじんに打碎いている<sup>(12)</sup>。又湯郷の庄屋万次郎の家へ押寄せた時、万次郎が「其方共は何国之誰なるぞ、一々名のるべし」と云つたのに対して、非人の中から三人の者が進み出て、「愚也万次郎、非人の身分として名所を名乗る時は御地頭之御首繩に掛る事、其方村役を勤めながら是等の事之弁へもなき無知なやつ」とまたくうちに打こわしている<sup>(13)</sup>。こうしたことから見ても、元文の頃においてはたゞ処罰のがれの口実として使われた非人という言葉は、その後の度々の一揆の中で次第に積極的な意味をもつようになり、慶応二年の一揆においては身分的な非人としてではなく、領主権力を排除した一つの組織として、ある誇りの

ようなものさえ持つて非人と称していることが推察される。農民が非人という賤民に自らを位置づけることによつて、何物の支配をも受けない自由を獲得したと云つても過言ではないであらう。更に矢吹正則をして「その挙動の敏速なること前代未聞なり」と云わせた行動の敏速さは、農民の戦術の進歩を物語っている。出雲のにせ札売りであつたとも伝えられている直吉の計略は、十人あまりの人数によつてたちまち数ヶ村の農民を動員し、途中幾手にも分かれてそれ／＼附近の村々を煽動し、何倍にも人数を増しては再び集合して城下又は在町を襲うといった戦術の巧みさは、これまでに見られないものであつた。強訴Ⅱ非人となるまでに、支配者の圧力をはねのけて成長した農民の非人としての意識の高まり、戦術の進歩は、長い戦いの間に徐々に形成され、成長して来たものと云うことができるであらう。

## 二 経済的条件

作州は山陽と山陰の境にある高原であり、平地としてはわずかに津山盆地があるだけである。平野は勿論丘陵も頂上に至るまでくまなく耕されているが、山国であるためそれ以上の耕地の増加を望むことができず、藩では年貢の確保・増加のため度々村落移転策をとっている<sup>(14)</sup>。しかも人口はかなり稠密であり、冬には大雪が降つて労働が制限されるといつた自然条件の下で、農業だけに頼つて生活していた農民は一度凶作に見舞われるか重税を課されると、たちまち生命の危機に脅かされる状態であつた。

「明治八年当時美作国物産表のうち、主穀類が五一%、醸造物が一

%を占め、商工業的産物が全物産額の一割にも達しない自然経済色濃厚なる状態より推論することを許されるならば、農業生産物の商品化は米以外はきわめて微々たるものにすぎなかつた<sup>(16)</sup>と云われるように、農業も主穀生産が中心であり、商業農作物はきわめて少い。同表から更に詳しく見てみると、林産物六%、綿及び綿製品五%、銅鉄製品二・六%、牛五・五%となつてゐる。これから見ても津山藩における商品流通は米穀を中心に行われたものと云つてよからう。「津山領川下ケ物運上」覚にも「米大豆穀類并酒石川下ケ」の運上が最も多い。正徳頃における川下品のうち主穀以外の農産物としては「煙草、綿、楮、うるし、胡摩<sup>(18)</sup>」等があり、これは明治八年に至つてもほとんど変化が見られない<sup>(19)</sup>。その他の特産物としては「材木・酒・酒粕・釘・鍋釜・炭<sup>(20)</sup>」があり、他国よりの輸入品としては「塩・醬油・藍玉・アミ・晷表・干魚<sup>(21)</sup>」等があり山国作州を瀬戸内海と結んでゐる。これによつて見ると酒の外には林産品・鉄製品がほとんど占めており、農業の外に林業・製鉄業が行われていたことを示している。しかし林業は藩の嚴重な統制によつて大規模な發展を見ず、製鉄業は中国山脈の附近の鉄山で行われたがごく限られた場所で行われたにすぎなかつた。津山藩においては専売も見られず、商品流通も顯著には行われなかつたと云つてよからう。

こうした産物は、交通の不便な作州におけるほとんど唯一の交通路たる河川を通つて、川下げと称して高瀬舟で積み出された。作州を流れるすべての川は、西大川(旭川)東大川(吉井川)の二大河川に注ぎ、それ／＼備前港、金岡港へ出る。川筋の村々では農民が舟株を持つていて専業又は副業として高瀬舟による物資の運漕を行つていた<sup>(23)</sup>。藩の年貢米も諸方の郷藏から津山川・久世川・倉敷川<sup>(24)</sup>を通つて積出され、御廻米の約半分以上が備前金岡港を経て大阪表へ送られ、残りが田舎払として金

岡・兵庫・灘・小豆島へ送られた<sup>(27)</sup>。

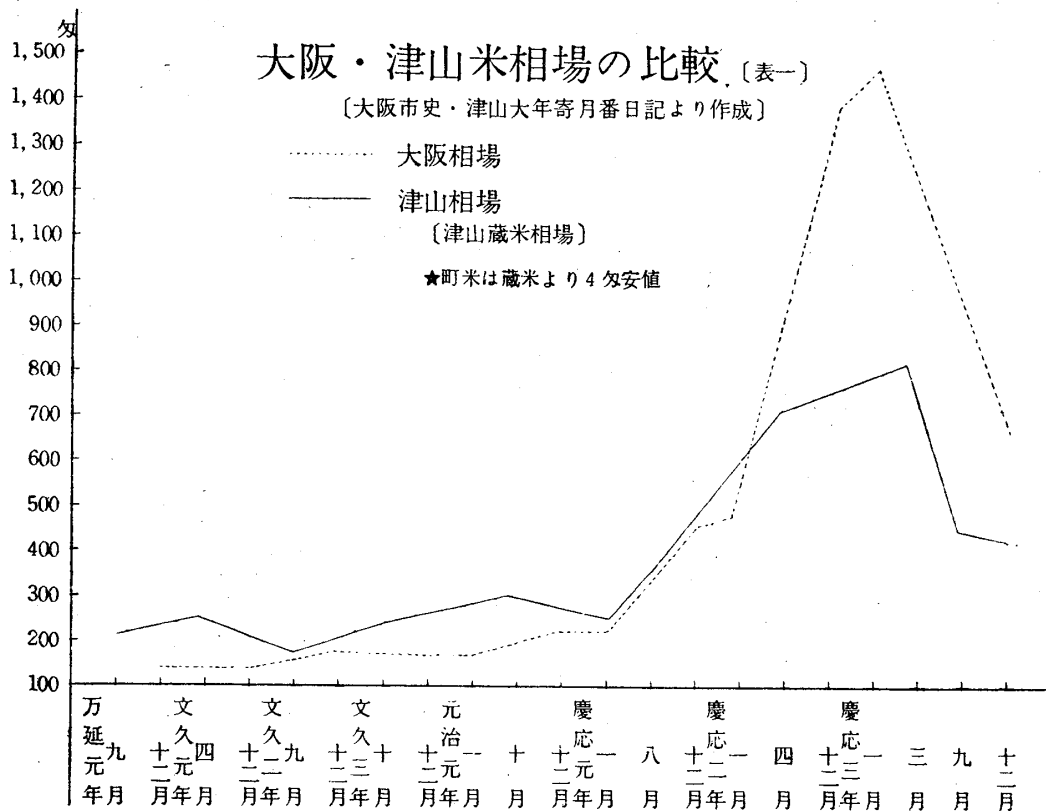
又一般の商人による米穀の売捌きは金岡まで川下げの上、金岡の米穀問屋の手を通じて大阪・兵庫又は紀川等へ積出され、一部は福渡から旭川を下つて岡山へも送られたようである<sup>(28)</sup>。文久二年において全河川の高瀬舟の輸送情況を見ると、全艘数の六六%が年貢米輸送に使用されてゐる<sup>(30)</sup>。こうした河川交通の發達により、藩の商業統制にもかゝらず川筋の村々に商業が發達し、商人が多数發生したことは当然であらう。藩では農民の商人化、商品経済の農村侵入を警戒して、城下及び倉敷・久世のみに商業農作物その他特産物の取扱いを認め、その他の村々では消費的なもの日常生活の必需品以外はほとんど認めなかつた。特に綿・米・楮の統制は嚴重であり、楮問屋を作つたり、拔売拔買を厳しく取締つた。

綿については綿会所のようなものがあつたようであるが、まだ藩が手当米を出して綿作の保護を行つてゐる状態であり、商品として顯著な發達を見る段階に至つていない。藩では又、大商<sup>おおあきない</sup>及び在方の新規商人を禁止し商業の發展を防ごうとしたが、消費的な産物の「小商」は比較的統制がゆるやかであつた為、在方村々に小商人の發生を見た<sup>(34)</sup>。こうした小商人は大体において町方の大商人の支配下にあり、幕末に近づくにつれて藩の統制の乱れにつけこみ、米綿の抜荷、米の出買い等を盛んに行つた<sup>(35)</sup>。津山の米市場はその大半を大阪へ送り出すため、大阪相場の変動の影響を非常に強く受けざるを得なかつた。幕末特に慶応二年の暴騰はすさまじいものがあり、津山においてもその影響を受けて相場は急騰した。(表一)

これに目をつけたのが在方又は在出の町方商人であつた。彼らは大阪商人と結託して、津山市価の一割余高くして村々から米を買集め、あるいは悪米を糺こもをかえて御藏米そつくり<sup>(36)</sup>に俵拵えをして、津山御藏米

## 大阪・津山米相場の比較〔表一〕

〔大阪市史・津山大年寄月番日記より作成〕



と称して川下げを行い暴利を博した<sup>(38)</sup>。強訴が在町及び川筋の村々の打こわしを行つたのも、こうした村々に商品流通が盛んに行われ、更にそこには米の川下げ、酒造・高利貸等によつて利益を得ている悪徳商人が存在した為であることは云うまでもない。旭川筋の商人は米と鉄とでその

富を築いたと云われるほどである<sup>(39)</sup>。

こうした米の川下げにより在々では凶作で米が少い上にも少くなり、津山市中では津山に米を出す者が少くなつたため、米不足を来した。こうした米の絶対量の不足に乗じて米屋は売惜しみをし米価を釣り上げたので米価は一躍高騰し、その日の食糧にも差支えることになつた。又「御蔵米似せ俵」は売り先きで悪米ということが分り、自然津山米の相場に影響し、お上では一図に百姓共が悪米を納めるせいのように考えて吟味を厳しくするようになったと農民達は考えたのであつた<sup>(40)</sup>。

貧民にとつて米の問題は切実であり、こうした悪徳商人が農民及び町方貧民の怨嗟の的になつたのは当然と云えよう。一揆の勃発の前には、市中の米屋の前に度々落首や張紙がされたと云われている<sup>(41)</sup>。この様な悪徳商人による米の川下げ、米価の釣り上げは、山間部の村々に特に大きな影響を与えたと考えられる。耕地の少い山間部では、高一石以下の農

〔第二表〕

	中 福 田 村			見 尾 村		
0.05 石以下	3			5		
0.05 ~ 0.1	5			4	17	65.4
0.1 ~ 0.3	15	44	81.4	6		%
0.3 ~ 0.5	10		%	2		
0.5 ~ 1.0	11					
1.0 ~ 2.0	5			2		
2.0 ~ 3.0	3	9	16.7	2	7	26.9
3.0 ~ 4.0	0		%	2		%
4.0 ~ 5.0	1			1		
5.0 ~ 6.0	1			0		
6.0 ~ 7.0	0			0		
7.0 ~ 8.0	0	1	0.1	1	1	0.38
8.0 ~ 9.0	0		%	0		%
9.0 ~ 10.0	0			0		
10.0 ~ 15.0	0	0		1	1	0.38%
合 計	54			26		

☆ 中福田村 文化15年

☆ 見尾村 文化4年

第一回山中一揆調査史料より作成

民が過半数を占めているといつたひどい状態であつた。「表二」これで見ると中福田村においては一石以下が八割強を占め、見尾村でも六割五分となつてゐる。一揆の口火を切つた加茂谷も山間部であり、これら村と大差のない状態であつたと考えられるが、その上加茂谷は上田と見積られ高い年貢がかゝつて来た。<sup>(42)</sup>

こうした状態にあつては、農民達は農業だけに頼つて生活することは不可能であつた。

山間部において考えられる仕事としては、炭やき、木こり、木製品加工等があげられ、附近に鉄山をもつ山中地方においてはこれらの外に鉄山の日傭稼ぎが考えられる。<sup>(43)</sup> その外鉄山では大量の炭を必要とし、製品原料の運搬のための人夫を必要とした。こうしたことによつてかなり広い範囲の村々の農民が、鉄山関係の仕事に吸収されたのであろう。こゝに半プロレタリアート化した農民の存在が推定される。このような山間の村々では、平場の村々よりも商品流通を通じてかえつて早くから商品経済が浸透し、且不足の食料の購入が行われていたことが考えられる。

従つて凶作による米の不足や米価の高騰の影響も平場より大きく、且深刻であつたのではなからうか。このように考えると、作州のような生産力の低い山国に前述のように度々大きな一揆が発生している原因の一つとして、こうした事情をも考慮に入れるべきであると考えられる。一方平場の村々は又これと事情を異にしている。文政十年西々条郡布原村では五石以下が三六%、五—十石が四〇%、同那古川村では弘化四年五石以下が三九%、五—十石が四二%となつてゐる。「表三」これによれば最大の地主が二〇—三〇石であり、これは慶応に至つても大規模な土地の集積を行つていない。<sup>(44)</sup> こうした平場の農村は山間部に比べればかなり良いと云えるがそれでも貧しいものであり、階層の分化は顕著には見ら

〔第三表〕

	文政10年 布原村			弘化4年 古川村		
	石	高	戸数	石	高	戸数
5 石以下	30.137		19	40.775		14
5 ~ 10	147.507		21	108.361		15
10 ~ 15	73.256		6	37.024		3
15 ~ 20	51.664		3	51.519		3
20 ~ 25	49.620		2	22.643		1
25 石以上	31.581		1	0		0
合 計	383.765		52	265.443		36

く家業を持たぬ遊民であつた。<sup>(46)</sup> 安政二年の中庄屋より大庄屋への弁書には、こうした没落農民が「非人同様之渡世」<sup>(47)</sup>を送つてゐる状態が書かれている。内藤正中氏はこれを「作州河辺村における安政以降——明治初年の階級分化は、倉敷村の正徳——天明朝に對比することができよう。したがつて、瀬戸内地域倉敷村の天明—津山盆地河辺村の幕末明治初年に、世直し一揆・村方騒動は激発する」と指摘している。<sup>(48)</sup>

津山周辺の村にあつてさえこうした後進性が見られるのであるから、作州全体としてはもつと遅れた状態にあると考へてよいであろう。河辺村の大庄屋土居氏は森氏以前から続いた豪族であり、地主手作経営を行つていたことが知られる。<sup>(49)</sup> こうした土豪的地主が作州にはかなり見ら

れない。これは作州の生産力の低さに加えて商業農作物の未発達等の原因があげられる。貧農の層が非常に厚いことも階層の分解の結果ではなく、農民の土地所有がきわめて零細であることを示しているに止まる。

しかし津山のすぐ東にある東南条郡河辺村においては、安政頃から中農層の分解が見られる。<sup>(50)</sup> すなはち一六〇石を所有する大庄屋土居氏を頂点として、七一戸中本百姓として自営農業を行つてゐる者二〇戸、一一戸は小作人又は日雇、駄賃稼ぎを行うその日暮しの貧民であり、残る四〇戸は日雇、奉公人、出作等を行い全

れ、天保五年には百石以上の地主が十九人存在<sup>(50)</sup>し、いずれも庄屋・大庄屋であることが分る。津山藩の農民構造を見ると、こうした大庄屋・中庄屋・庄屋の下に長百姓・本百姓があり、更にその下に名子・家来が存在している<sup>(51)</sup>。延宝六年の規定によると、十石以上の者を本百姓、それ以下の者は本百姓の名子と定め、その後も高十石をもつて本百姓の標準としている。しかし生産力の低い作州においては十石以下が圧倒的に多く、十石は上位に属するため、十石を境として本百姓と名子を分けるという藩の政策は、実際にはあまり実行されなかつたようである<sup>(52)</sup>。名子には名子筋のもの、惣作地に主付けされて入つて来た名子入百姓<sup>(53)</sup>の他に、絶人となりそのまゝ村に残つて名子となつたもの等<sup>(54)</sup>が考えられ、名義だけの名子請が行われたようである。こうした名子は文化頃を境として急激に減少して来る。名子のうち十石以上の者は寛政二年に解放される<sup>(55)</sup>が、それはごくわずかであり、残りの名子がどこに吸収されて行つたか今後究明されなければならない問題である。いずれにしても、家来は中世から続いて来た隷属的な性格をもっているが、名子は作州の場合隷属性は少くかなり独立性が強いと云えるであろう。一般的に見て、幕末期作州においては階層分解はまた顕著に行われず、大多数の零細層の上に自営的な小地主・土豪的な手作地主が存在し、ごくわずかの寄生地主が見られる状態であつたと推測される。主穀生産を中心とする作州で、低い生産力と高率の貢租の下では大規模な土地の集積は行われ得ず、主として酒屋・米屋を営む地主・商人によつて、わずかず集積されている段階であつた。

改政一揆において打こわしの対象となつた特権商人の中には酒造・米穀売買、又は質・高利貸<sup>(56)</sup>によつて成長し、寄生地主化を始めていた者も考えられる。勿論小作もかなり行われ、慶応二年には小作貢租負担率は

文久三年の五五%から八〇%に急増<sup>(58)</sup>し「地主へ小作人共より勘弁筋可相頼旨寄々申相居候者も有之候様子之由<sup>(59)</sup>」で、小作人が打こわしを行つてゐる。とは云え、作州においては小作が零細な自営農に対して優位を占め、寄生地主の成長が顕著に見られる段階に至つておらず、それは明治十年以後に俟たなければならない。

このような後進地帯的な特色を有する農村において、文久以来の一割増となつた貢租をどうやつて支払うことができるであろうか。その上に凶作・米価・物価の騰貴である。こゝに至つては農民の再生産過程は破壊される外なかつた。ようやく階層分解が進行しはじめ中農層の分解が惹起されて来た慶応二年において、没落に直面した中農層によつて改政一揆は計画せられたのであつた。

しかし、こうした苦しみは農民だけではなかつた。改政一揆にはこれまでの一揆と異り農民だけではなく、都市の貧民が多数加わつて打こわしを行つてゐるのも、米価の異常な高騰とそれに伴う諸物価の値上りが都市の貧民にとつて切実な問題であつた故である。

更にこの一揆にはエタと鉄山労働者が加わつてゐることが注目される。エタは山中一揆においては浪人と共に一揆弾圧の先頭に立ち<sup>(60)</sup>、又明治六年においてはエタ征伐一揆が行われるという風に、常に農民と対立・嫌悪される立場にあつた。鉄山労働者は山子と云われ、各地から山中へ入つて来て働いている労働者であり、鉄山小屋に住んでいたが「米穀にも」不自由と唱えて鉄山小屋を打こわしている。

又、田羽根では鉄山支配人が買米残らず差出し「休山した方がよいのなら休山するから」と歎願して打こわしをまねがれている<sup>(61)</sup>。この様に見て来ると、この一揆は貧窮の農民を中心として、それに都市の貧民及びエタ・鉄山労働者が加わつたものと云うことができる。

しかしこうした連合が、共通の意識又は何らかのイデオロギーを持つて行われたとは考えられず、あくまで米を媒介とした同盟であることは云うまでもない。そこに同盟のための条件が除去されるとすぐ崩れてしまい、エタ征伐といった内部的対立を生じるというこの同盟の弱さがあるのである。

改政一揆全体を通じて米の問題があらゆる方面に関連し、それを動かしていることを忘れてはならないであろう。

### 三 津 山 藩 の 事 情

このような自然・経済的条件を基盤とする津山藩の財政は、御多分に  
もれず苦しいものであつた。そのことは藩の表高十萬石に対して安政三  
年内高が十萬三千三百石余であることからも察しられよう。農民は貧し  
いが藩としてはそうした農民以外に他に財源を持たないため、藩の財政  
困難はすべて農民に転嫁され、それにしたがつて農民はますます疲弊す  
るばかりであつた。幕末に至つてはこうした悪循環による矛盾は頂点に  
達した。勘定方馬場貞観の手記によれば、嘉永元年夏には「御国許の銀  
札場両替差支危急の場に至り、更に大阪表の借財は「当年より増廻米  
の約定にて御差引漸く相済候得共当暮は逆も筋立候義不相成其訳は先年  
御借財嵩み最早此上御借財とは少しも調不申一同断ニ及候より外術計  
無之」と云つた有様であつた。このまゝで行けば藩は立行かなくなる。  
そこで馬場は家老達と相談の上「今年は去る己年仕法年限明に付莫大の  
返済銀有之此返済頼談縦御請候ても猶七八百貫目の不足ニ付大改革仕法  
替いたし御借財不残及断候外術計無御座」と大改革を決意し、京大阪の  
出入りの重立つた商人を呼び三年間元利置据を申渡した。これは三年を

限つて元利を据置き、その間に蓄えられた利益で支払いをするというものであるが、結局これは「年限明来る亥年に至り猶又三ヶ年置据申達永々如此して御無借の姿に可相成」という強引な借倒しであつた、この時の借財は十四萬二千五十兩外に御屋敷地家賃元に三千五百兩、銅座に八千兩その他古年賦が一萬八千兩、計十七萬一千五百十兩余という、小藩にとつては莫大なものであつた。こうした財政の窮乏は、この非常手段によつて一時持ち直したかに見えた。しかし開港に続く物価の騰貴、更には再度の長州征伐の出費等により、ますます困窮の度を加えた。そしてそれは必然的に農民に対する貢租收奪の激化に向わざるを得なかつた。すなはち文久元年より年貢の一割増加、家士より百姓・町人に至るまでに三度に亘る御用金の申付け、新税の設置がそれである。藩では「御勝手向兼々御不如意之処近年打続莫大之御入費有之其上度々御軍役被成御勤追々被及御窮困」そのため「中々以御取箇物又は御備入等而已ニ而御取凌難被成御勝手方千辛万苦如何其手段無之無抛年再三市郷江献金并調達等被仰」その上に「取続罷在候向者大身小身共員数之多少ニ不拘存達次第献金又者調達候様」と藩士にまで御用金を申付けている。又富農・商人に対しては度々「苗字帯刀御免」「御合力御門松御免」を乱発して献金をつのつている有様であつた。

こうした献金を通じて、藩と特権商人との結びつきが生まれて来るのである。更に農民は開港による沿岸防備、長州征伐と夫役を申付けられ、三年続きの凶作に見舞われたように、米価物価の騰貴に苦しまなければならなかつた。一揆の条件は成熟し切つてまさに爆発寸前であつた。藩ではこうした一揆を警戒して庄屋層に武装させ、元治元年には村役人層の子弟の中から百人を選んで農兵とし一揆に備えた。しかし苦しみ耐えに而えて来た農民が、ついに鎌をとり竹槍をもつて立ち上がった

た時、この様な備えは何の役にも立たなかつた。加茂谷に起つた一揆はたちまち全領内を席卷し、更に作州全体にひろがつて行つた。

こうした一揆の勢に、藩では呆然としてほとんどなす術を知らなかつた。享保の山中一揆の際には代官に「生殺与奪及び機宜即決ノ權ヲ許シ」<sup>(68)</sup>て農民の鎮圧に当らせ、五十四人を斬首し、数十人を追放するといった強硬な態度をとつた藩も、幕末においては完全に無力化し、鎮圧のための物頭等の派遣も後手／＼にまわつており、しかも農民達に対して何の威力も持たないばかりか、かえつて嘲弄されるという弱体ぶりを示している。このような武士の權威の失墜に、一揆鎮静後藩では市郷の者に対して「已後武家に対し不礼法外之義堅有之間敷」<sup>(69)</sup>と触を出して權威の回復に努めているが、最早どうすることもできない段階に立ち至つていた。従つて強訴に対する処罰も驚くほど軽いものであり、農民の要求もほとんど全部通されている。

しかしこれには藩権力の無力化だけでなく、藩内部に保守派と佐幕派と改革派と勤王派の対立があつたことも原因となつていると考えられる。津山藩は親藩であるだけに幕末の変動期にあつて藩論は一致せず、中々去就を決めることができなかった。特に徳川家から養子に迎えられた前藩主斉民<sup>(70)</sup>(確堂)が健在であり、陰然たる勢力を握つていたため、問題はまず／＼複雑になつた。すなわち、津山藩における勤王・佐幕派の対立は、そのまゝ改革派中下級武士を中心とする慶倫派と、保守的上級武士を中心とする確堂派の対立でもあつた。こうした事情の下にあつて、津山藩は表面的には幕府に従いながら、一方藩内の勤王派を通じて朝廷や他藩の志士達と連絡を保つていた。文久二年用いられて国事周旋係となつた鞍懸寅二郎は「上京し諸藩の動静を窺ひ有志者と相結び、縉紳に出入し劃策すること多し」<sup>(71)</sup>と云われている。文久三年正月には黒田彦

四郎、鞍懸寅二郎、矢吹弓治、井汲唯一、藤本十兵衛ら勤王派武士の斡旋により、津山藩に内勅を賜り、これより藩論は勤王に決したと云われている<sup>(72)</sup>。しかし文久三年八月の政変の後勤王派に対する弾圧が激しくなり、彼らは一時沈黙を餘儀なくされた。これより少し前改革派の中でも激派と目される井汲・藤本らは処罰を受けており、<sup>(73)</sup>改革派は藩政から斥けられた。その間彼ら改革派と民間の勤王家・豪農との同盟が固められて行つた。二宮村大庄屋立石正介、香々美村大庄屋中島衛、土居村庄屋妹尾三郎平等を中心とする豪農層は、尊王攘夷を目標として改革派と結びついて行つた。やがて改革派はその実力によつて徐々に活動をはじめ、鞍懸は元治元年小豆島における英人の島民射殺事件に交渉の任に当り、八月海老原景員と共に慶倫にすゝめて幕府へ長州征伐反対の建白書を出させたりしている<sup>(74)</sup>。改政一揆に當つて鎮圧に成功したのは鞍懸ら改革派の鋭得によるものであつた。彼らは又、強訴に対する発砲に反対してこれを止めさせ、二十六日直吉の自訴に対して極刑が行われるという噂にすぐ助命歎願を行つたりしている<sup>(75)</sup>。一揆に対して藩内で助命運動が起るといふことは実に珍らしいことであり、こゝにも藩内部の微妙な対立と、豪農との同盟を通じて農民の持つ力を知り、こうした農民の反抗運動の反封建的エネルギーを汲みとろうとした意図が伺われる。更に又農民の出した要求がほとんどそのまゝ容れられたことについても、これら鎮圧に功のあつた者達の意見が容れられたのではなからうか。

無為無策の保守派に交つて、藩内において次第に勢力を伸長させつゝあつた改革派が、一揆鎮圧の実績によつて藩内における彼らの地位を決定的にしたことは想像できよう。そのためには盛り上がりがつて来た農民の力を背景として利用することが、最も有効な方法であつたと考えられる。彼らと同盟した豪農層がやがて明治に入つて美作自由党を結成し、



広汎な農民層を下部組織にもつた、大規模な自由民権運動を繰りひろげることになるのである。

## 第二 慶応二年の改政一揆の意義

### 一 慶応二年の政治・社会情勢

慶応二年は、大きくゆらいでいた幕藩体制の崩壊に決定的な一打が加えられた年であつた。嘉永六年のペリー来航以来、開港・安政の大獄・万延元年桜田門の変・文久二年坂下門の変・同三年天誅組の乱・生野の変・元治元年蛤御門の変・同年八月及び慶応二年再度の長州征伐と幕末の多端な情勢は各地に一揆を頻発させた。この年一揆件数は四十余件に上り、徳川時代を通じての最高を記録した。

こうした激しい打こわしを伴つた一揆を導いた最も大きな原因となつたのが開港Ⅱ貿易の開始による諸物価の騰貴であり、今一つは長州征伐であつた。貿易の開始は輸出品たる茶・生糸・銅等を騰貴させ、これに乗じた商人達の投機的価格の釣り上げによつて諸物価は高騰し、必然的に民衆の暮らしは苦しくなつた。しかし慶応二年の一揆高揚の直接的な原因となつたのは長州征伐、特に第二回のそれであつた。第二回の長州征伐の報が伝わるや、大名は米穀の領外移出を差留め、商人は米穀を買占め売惜しみをして米価の釣り上げをはかり、米価は急騰をはじめた。<sup>(76)</sup>特に長州征伐のため將軍、旗本はじめ諸藩の兵が大阪に集まつて来たため、大阪地方は米価及び諸物価が高騰し民衆の窮乏は極度に達した。

大阪では慶応二年正月一石四七三匁であつた米が、四月初めには七〇

〇匁、六月末にはついに一貫目を突破するといつた状態であつた。<sup>(78)</sup>勝海舟が徳川慶永に宛てた手紙には「唯此の如くに而御承引相成候は、下民一時之蜂起も難計、人心之離散は日に相見、是は尤可恐」とあり、民衆の蜂起を憂慮している。しかし同年五月一日、勝の心配はついに事実となつて現われた。この日西宮で貧家の主婦によつてはじめられた米の安売り運動は西宮中にひろがり、八日には兵庫、続いて灘・池田・伊丹にも波及し、浪士が交つてゐるらしいとの風評を生むほどの統制をもつて米屋の襲撃を行つた。更に町奉行の必死の防止にもかかわらず、十三日ついに木津・大阪辺の打こわしがはじまり、十四日中大阪全市は打こわしの渦に巻きこまれ、八百八十五戸が打こわされたと云われている。その他和泉・河内・奈良と「大阪十里四方は一揆おこらざるところなし」と云われるほど、一揆は各地にひろがつて行つた。五月二十八日には江戸にも打こわしがはじまり、品川の宿から出て市中各所で米屋・富商の打こわしを行い、それが六月四日まで続いた。更に六月十三日には武蔵全郡に大規模な打こわしが起り、次いで九月十日再び江戸に一揆が起り、商家は云うに及ばず大名旗本屋敷まで押かけ、十日間にわたつて江戸市中を混乱に陥れた。<sup>(79)</sup>こうした人民反抗の波に、各藩主及び幕府の内閣においてさえ長州征伐反対の声が強まつて来た。その上長州征伐は幕府方の完全な敗北となり、家茂の死を機会に九月休戦を余儀なくさせられた。兵乱が終つてからも、各地の一揆の波は引かなかつた。これは物価の騰貴と共に献金・貢租の増加、長州行き人夫の徴発に反対するものが多く、長州征伐による藩財政の窮乏が、すべて農民の上にしわよせされて来たことを物語るものであつた。「一犬虚を吼れば万犬実を伝ふ。一国乱れて万国騒し」<sup>(80)</sup>と云われるように。大阪江戸の打こわしを頂点とする一揆の波は、次第に作州にも及んで来ていた。五月には播州

赤穂領、次いで六月但馬の村岡に軍夫役及び重課により暴動が起り<sup>(82)</sup>、七月には石見の銀山領が戦争による混乱と米価高によつて暴動を起した<sup>(83)</sup>。八月に入ると浜田藩が長州軍に追われて作州の領地久米北条郡鶴田村へ逃げ出した後、領民が米穀下直売払、夫役免除等をかゝげて強訴し<sup>(84)</sup>、更に同国跡市組が村吏に対する反感から騒立てゝいる<sup>(85)</sup>。

こうした全国的な農民の反抗運動の高揚に、幕藩体制は危機に直面し、最早何物をもつてしてもその矛盾は覆いがたく、封建制度の崩壊は目前に迫つていた。一方、長州藩等の反幕勢力は、こうした盛り上がる民衆の反封建エネルギーを巧みに利用しつゝ幕府軍に対して勝利を収め、着々と倒幕勢力を固めて行つたのである。改政一揆もこうした慶応二年の政治・社会情勢の中においてとらえられなければならないのは当然である。

## 二 慶応二年の改政一揆の意義

津山藩の財政困難は幕末に至つては最早弥縫することは不可能な事態に立ち至つていた。

しかも他に何ら財源をもたない藩は、その困窮を農民に転嫁する以外に方法を持たず、ます／＼年貢の収奪を激しくするばかりであつた。慶応二年においては連年の凶作に加えて貢租の増加及び取立ての強化、長州行人夫の徴発、新税の設置……とこれ以上の収奪は不可能というぎりぎりの限界に迫こまれた農民の再生産過程は破壊に直面していた。農村内部にあつては村役人・地主・商業高利貸資本と中貧農層との対立が次第に激化して来ている。こうした封建制度の基本的矛盾が開港による物価・米価の騰貴、長州征伐等の条件によりますます／＼尖鋭化し、ついに爆

発を見たのである。慶応二年の一揆を「長州征伐を機として急速に激化された社会的矛盾の表現<sup>(86)</sup>」と見るならば、改政一揆はその最も典型的なかたちであると云つてよからう。

没落に直面している中農層に指導されて起つた一揆は、発生後たちまちのうちに貧農に主導権が移り、それと共に村役人・米屋・酒屋に対する打こわしが激化して来る。これは六月に武蔵一帯に起つた一揆がやはり山間部に生じ、山沿いの町々から平場へ展開している事実と非常によく類似している<sup>(87)</sup>。この一揆においても、打こわしの主体が林業に従事している貧農であり<sup>(88)</sup>、質屋・穀屋・酒屋等が打こわされている。これは山村の特殊な商品経済の構造が矛盾を激発させたものと把握され、作州の農村の後進性を考えると顕著な農民の階層分解の進展によるものと考えすることはできない。山間部においては、林業又鉄山に関係することによつて平場よりも商品経済の浸透が早くから行われ、半プロレタリアート化した農民を作り出した。慶応二年の、異常な米価・物価の高騰及び凶年による米の絶対量の不足は山間部に特に大きな影響を与え、一揆の口火を切らせるに至つたと云うことができよう。これは前述したように貧窮の極に達し、ようやく農村内部の対立を激化させつゝあつた平場の村にまた／＼うちに燃え移り、ついに作州全体にひろがつて行つたのである。

慶応二年の全国的な打こわしの一環としてこの改政一揆を眺める時、大体次のように結論づけられるであろう。第一に改政一揆は形態的にはすぐれて米騒動的な色彩の濃厚な世直し一揆であり、米を媒介として階級を越えた広い層の同盟が成立したことである。貧農都市の貧民・労働者・エタという身分・階級を越えた同盟が、たとえ米を媒介とし、一時的であるにもせよ成立したということはそれまでに見られないことであ

り、特筆されるべきであろう。更にこの同盟は、来たるべき真に共通の意識で結ばれた国民的規模における闘争の萌芽を為すものとして大きな意義を持つのである。第二に改政一揆は長州征伐の影響を最も強く反映し、意図するとならないにかゝらず、戦争反対としての性格を強く持つてゐる点で政治的に高く評価されなければならない。歎願文にも見られるように、長州行人夫の徴發、新税及び諸人用・諸割符銀の反対、難渋人献納金の年延等の要求は、いかに長州征伐の重圧が大きかつたかを示している。又米価の高騰も長州征伐が主因をなしており、大阪の米価の高騰はたちまち津山に影響して改政一揆の原因の一つとなつた。戦争地帯に近く、七月には浜田藩が領内に逃げて来るなど直接間接に戦争の影響は大きかつた。

作州の農民にとつて、こうした戦争による重圧がどれほど苦しいものであつたか想像に難くない。改政一揆がこうした重圧に反抗することによつて戦争反対の意図——それが無意識的であるにせよ——を持つていたことは否定できない。このような農民の戦争反対は否定できない。このような農民の戦争反対の気運の高まりが、兼々長州征伐に反対していた勤王派に利用されたのは当然であろう。

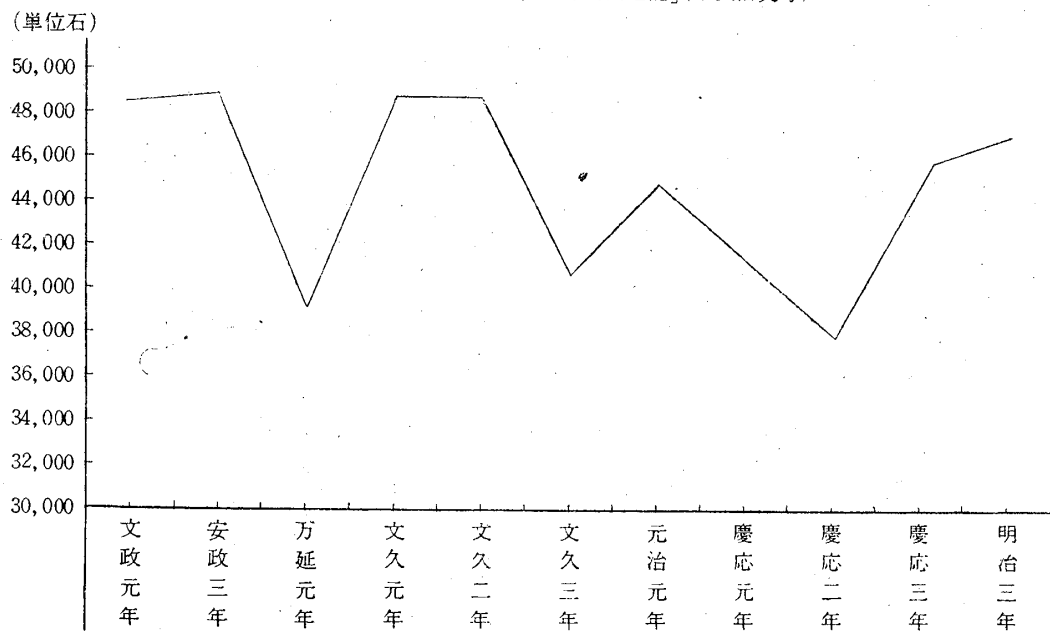
慶応三年五月廿八日慶倫が幕府に対して「加之客冬領民共慮々嘯聚仕早々鎮定之姿ニハ御座候得共爾来鎮撫方日夜苦心罷在候折柄容易発途難仕……幸先比解兵被仰出候折柄芸藩へ兼而渠之情態熟知仕居候儀其他一二之大藩江御委任服罪之術周施被仰付度」と長州征伐に反対しているのも、こうした動きを反映したものと考えられる。第三にこの一揆は短期間ではあつたが、その大規模な、激烈な闘争と波及の広さによつて津山藩に深刻な打撃を与えたことである。これによつて藩の財政困難はその頂点に達した。強訴に対するお救米二万四千百五十俵は、大體藩の取

米の六分の一強であり、藩にとつてどれほどの痛手であつたかは云うまでもないであろう。慶応三年二月の藩日記には「近年臨時の入費多端御立直之期無く加之去歲水風災之御損毛不少並百姓共騒立候節莫大之御出方」で御勝手は差支え「取統方術斗無之」そのためには「破格之御取締

### 津山藩取米の変遷 (表四)

〔地方日用記〕より作成

★「享保三年以後御成箇通記」(本沢信美写)



方罷成候外御手段無之候<sup>(91)</sup>と書かれている。更に藩では「銘々請前方之儀」は申さず、心付いたことがあれば遠慮なく申し出るようにとその無力を告白している。費用を減らすために門番をやめ番所を締切つているのもよく／＼困つた為であろう<sup>(92)</sup>。こうした藩財政の破綻と共に、藩権力・武士階級の無力化が白日の下で引き出された。藩は一揆勢の後手後手にまわつており、しかも打こわしが激化するとどう鎮圧する術もなく、たゞ呆然と眺めている有様であつた。武士の権威もすっかり失われ、悪口嘲笑されるばかりか要求の取次ぎを申し出ても「お前達ごときに頼まぬ。直々お殿様にお願ひする」と相手にさえされなくなつてゐる。ここに至つて農民達は、今まで自分達を苦しめて来た者の主体をはつきりと覺り、それに対して激しい反抗心を燃やしていることが感じられる。あまりにも激しい民衆の勢と野火のような一揆の拡大は、すつかり無力化した藩にとつて致命的な打撃であつたにちがいない。第四にこの一揆鎮圧を通じて、藩内で改革派Ⅱ勤王派の政權掌握が達成されたことである。このような事態を保守派の上級武士は收拾し、乗り切ることが出来なかつた。文久の政変以後一時鳴りをひそめていた鞍懸ら中下級の改革派武士は、この一揆を鎮圧する実力を持ち、更に豪農層との同盟を通じてこうした農民反抗のエネルギーが持つ効力を知り、それを利用することによつて藩権力を掌握し得たのであつた。この後、藩内における改革派の活躍は目ざましいものがあるが、時すでに遅く、彼らの活動のチャンスは失われていた。こうして津山藩は明治維新を迎えるのである。富岡・長光氏は津山藩の明治維新における立ち遅れの原因として「下級武士による藩政掌握期が長州藩等に比してはるかにおくれたこと」<sup>(93)</sup>をあげている。津山藩において、保守派Ⅱ佐幕派對改革派Ⅱ勤王派の対立は、そのまゝ前藩主で家斉の十四子確堂派對現藩主慶倫の対立であり確堂の

発言権が強かつたこと。改革派は下級武士だけではなく重臣を含めていたこと<sup>(94)</sup>。従つて改革派内部に分裂が生じ改革派を倒幕派へと踏み切らせ得なかつたのではないかと考えられること等を付け加えるにしても、改革派がもう少し早く主導権を握つていたら、津山藩の明治維新への道は変つていたであらうと考えられる。明治に入つてこうした改革派下級武士と結んだ豪農層の指導の下に自由民権運動が展開されるのであるが、これについては章を改めて言及するつもりである。

未曾有の一揆高揚を示した慶応二年において、改政一揆は長州征伐反對という政治性をもち、身分階級を越えた広い層の同盟を成立させ、国民的規模における闘争の萌芽を作りながらも強固な指導の組織を持たなかつたこの一揆は、結局その盛り上がる力を結集し、持続させることができなかった。しかし慶応二年において、改政一揆はその激烈さと規模の大きさ、波及範囲の広さ等によつて津山藩に深刻な打撃を与え、改革派による藩政掌握の機会となり、津山藩の絶対主義への道を開いたことも忘れてはならない。

下からの革命の中核としてついに幕府を崩壊に導いた慶応二年の全国的な反封建闘争の中で、津山藩改政一揆も果敢に戦われたものと云うことができよう。

## 註

- (1) 黒正殿著「封建社会の統制と闘争」三〇三頁
- (2) 「岡山県百姓一揆年表」吉備地方史月報六号所収
- (3) 「封建社会の統制と闘争」三一九頁
- (4) 「作州地方では戦国時代屢々戦争が行われ、敗戦の将卒で土着の農民となつた者が多く、他地方から落ちのびて来る者も多かつた。従つて武士氣質の者が多く、時の支配者階級が外来者の新分限の者であるからこれを軽侮し反抗する氣風が強かつた」とする。しかし、たとえこうした土着民(土豪)がいくら存在するにしても、それはごく一部であり、それも何百年もの間に變化せざるを得ず、作州全体にこれほど広汎な一揆を度々惹起する要因とはなり得ない。
- (5) 平野義太郎「封建主義の危機と凶作」歴史科学第四卷第三号
- (6) 「美作鏡」嘉永五年の「美作全国の石高及び知行高」によれば、  
但馬国生野支配所、倉舖支配所、津山預所、竜野預所、明石領、土浦領、古河領、竜野領分、沼田領分、勝山領拳母領分、浜田領となつてゐる。  
吉田郡誌所収
- (7) 山中一揆研究会「山中一揆の問題点」吉備地方史月報十八号所収、十七頁
- (8) 林 基著「百姓一揆の伝統」七九頁
- (9) 「日本経済史辞典」上巻 一一六—一二七頁「えた非人」
- (10) これに対して抱非人として藩権力の末端に組みこまれ、盗賊番、非人番等を行つてゐる者とは區別されなければならない。
- (11) 「勝北非人騒動記」
- (12) 「改政一乱記」巻二
- (13) 前掲書
- (14) 「美作略史坤巻」「承応元年令農民居田間者徒山麓」
- (15) 「美作聞伝記」三 宝永十五年人別改  
人口は十九万六千三百六十人であり、全人口に対して農民が大体八割五分を占め、男女の比は男百人に対して女八五人となつてゐる。  
尚「新訂作陽誌」には男百人に対して女五〇人の村もあることが記されていて、女兒の間引きが相当行われた事実を示している。
- (16) 大林秀弥著「維新期の農業経営について」歴史評論一九五七年十二月号 七六頁
- (17) 「北条県史」全 吉備文書研究会編 明治九年五月調査による。
- (18) 正徳六年正月「川筋舟改番所定帳」  
津山郷土館所蔵
- (19) 明治八年「北条県一覽表」岡山県立図書館所蔵
- (20) 「津山領川下ケ物運上」覚 山中一揆調査史料第二集所収  
「美作国津山領香々美村十分一口留定帳」西々条郡十分一口留番所
- (21) 「川筋船改番所定帳」
- (22) 矢吹正則著「旧津山藩林制摘要」(津山温知会誌 第四編所収)によれば「林山ノ等級ハ從來村落ニ於ル上中下ノ村位ト木材薪炭輸出ノ便否トヲ斟酌シ先ツ村位ヲ三等ニ定メ而テ村中ノ林山ヲ上中下二分チ又コレニ各上中下ノ区別ヲ設ケ以テ計二十七等トナシ賦税セシモノニテ」とあり、山林に關する運上も非常に多かつた。
- (23) 鈴木直二著「徳川時代の米穀配給組織」三二〇頁
- (24) 吉井川のことを云う
- (25) 旭川のことを云う
- (26) 吉野川から吉井川に入る
- (27) 嘉永二年「御廻米仕分」愛山所蔵
- (28) 「徳川時代の米穀配給組織」三二三頁
- (29) 文久二年「御城米御川下賃米取調ニ付書上帳」、同年「作州三川筋御城米御收納米並売荷積高書上帳」(美作高校所蔵)
- (30) 柴田一著「近世高瀬舟楫の崩壊過程」岡山史学第二号 五四頁
- (31) 寛永元年「工商人心得方并郷中商法地御定之達」(美作一國鏡所収)には、  
「一、倉敷、久世、勝山ハ御城下並ニ工商業差免事」とある。  
「郷中御条目」四 文政二卯十二月十二日 史料集 河本・目木・河内・富構へ触  
一、御城下并久世町之外諸荷物他江売捌候義且又船積川下右両所之外不相成段申渡置候間心得違有之間敷……  
「郷中御条目」四 文政三年十二月廿二日  
一、御城下之外実綿買集操綿ニ仕売買之儀不相成段……  
(32) 元治二年四月 桶屋町菊井伊右衛門等六人の商人に楮問屋を命じてゐる。
- (33) 弘化四年 古川村「綿座難波につき御手当貸付帳」によると、

綿作高七一石八斗一合のうち、貸付米六石三斗八升二合で約八・二%、持高に対する綿作高の割合は二五・四%となっている。

又、こゝでは全部の農民が一石前後の綿作高を持つていて、地主への集中は見られず、藩から強制的に綿作を命じられていたことが知られる。

(34) 「郷中御条目」四 安藤精一著「津山藩における在方商業の発達」

(35) 前掲書、享保十一年九月「御領分中米買申間敷」「町方用事留」一 玉置家文書、享保六年淀屋五兵衛らが抜米について一札申付けられている。

「御触書控帳」 玉置家文書、弘化四年

「郷中出米」の途中買いが行われていることが書かれている。

(36) 「徳川時代の米穀配給組織」には、当時米はすべて備前金岡港を経て大阪に送られていた為、大阪相場の変動は船頭が金岡から帰つて来るまでは津山に伝わらなかつた、そのため大阪商人は米価高の折には西大寺(金岡)へその報が伝わる前に直接津山へ仕入れに來たことが指摘されている。

(37) 「津山藩領民騷擾見聞録」

(38) 前掲書、「改政一乱記」卷一

(39) 「山中一揆の問題点」二六頁

(40) 「改政一乱記」卷一

(41) 「津山藩領民騷擾見聞録」

(42) 「村位石盛表」岡山県立図書館蔵

(43) 寛保二年、作州中筋の「鉄山閣合書上帳」では養野村和泉権現山鉄山の備前国但馬屋では、山小屋三十二軒、鍛冶職場四軒、山子(扶持人)三十五人、日雇七〇人、備中国大阪屋では山小屋三十四軒、鍛冶場三軒、山子四〇人、日雇六〇人となつてゐる。

(44) 古川村「小割帳」によれば、古川村最大の地主

河田又左衛門、佃治郎右衛門の所有高は、弘化から慶応に至るまでほとんど変動が見られない。

(45) 谷口澄夫・石田寛共著「近世村落構造に関する一考察」史学研究記念論叢所収 二〇頁

(46) 前掲書

(47) 安政二年八月中庄屋恵之次から大庄屋土居太郎右衛門宛の弁書「河辺村之儀高七百八拾四石餘家数七拾壹軒人別三百五拾式人内式拾軒当時百姓仕罷在候拾壹軒少々ツ、請作仕日雇駄賃持仕当日凌罷在候四拾軒ハ何之家業も無之日雇奉公人又者他村江出稼等仕中ニ付非人同様之渡世仕る者有之」

(48) 内藤正中著「尊攘運動と豪農層」——作州民権運動の歴史的前提——吉備地方史月報十五号 八頁

(49) 土居家においては、文政五年、持高一六四・四一八石で下男五人、下女三人、家族計十八人、家来二人、牛二頭、馬一頭となつてゐる。

(50) 「天保五年 午八月津山領分中持高百石以上調査抜」福島家文書史料集

(51) 中島文書、慶応三年頃の記録

一、長百姓…年久敷無断相続仕其村にて頭立候者

一、本百姓…是は禄高の多少、人柄の高下に不拘

先前より其村に生立候本組の百姓、

尤長百姓、本百姓、五軒を五人組と

相定候其内にて頭立候者を五人組頭と相究此組頭長百姓と申候

一、名子百姓…是は先前より名子筋の者又は他所より罷越候もの長百姓の内引請御願

申上入帳仕候故其引請の者を名親と申候或は百姓本百姓の者にてても別宅

仕其組合人数多く成候得は本百姓の名子にいたし候類も御座候

一、家来百姓…是は當時二宮様には無之候是亦前

前より家来筋の者或は他所より参候者を長百姓引受家屋敷諸道具等主人

より拵遣し指置候者にて御座候、百姓会合の時は村内並居末席に座し申

候但し主人へ祝日を勤め何か格別の用事有之時は呼寄遣ひ申候

(52) 「美作一國鏡」岡山県立図書館蔵

一、百姓たるものの内高拾石以上所持不致向ハ一人前百姓之名義不相立候事

二、高拾石以下のものハ百姓名義者之名子ニ可申附事

三、新たに分家可致者も同様高拾石以上分地不致向ハ其之者の名子名下たるへき事

四、諸願届宗門帳ニも其之名下たる事を肩書可致事

五、名子名下ハ百姓之末席たるへき事

延宝六年(午)二月

右之通相達候間村々々迄無洩急度触達可申者也

(53) 宝永五年 河辺村御仕置五人組帳(米沢家)

三郎右衛門は高八石九斗余で二人の名子を所有(忠右衛門一五斗余、利右衛門一三斗余、加兵衛一高一升家来)

高八石余の源六も三斗余の名子を持つてゐることが分る。

又、古川村においても、無高同様の百姓が名子を所有している例があり、名子の方が名子主より高が多い場合も見られる。

(54) 布原赤木太郎氏文書、書簡  
御書面被下拝見仕候。如仰の暖氣之砌御座候得共弥御勇勝ニ可被成、御勤珍重之御義奉存候。然ハ

当村弥吉当二五拾四才、同人女房その当三十八才ニ相成申候。夫婦共其御村方源右衛門与申人之名子入百姓ニ仕度旨、申出候ニ付、当村方親類之もの共相糺申候処、何之故障も無御座候。左様ニ思召可被下候。

右ニ付、当村方人別相除ケ可申候。左候得ハ其村方人別ニ御加帳可被成候。後日ニ至而此方右之もの共ニ附、聊申分決而無御座候。依天御答可申上候。先ハ荒々御返書如斯御座候。

丑三月

芸州加茂郡

広村庄屋 武兵衛印

作州西々条郡布原分御庄屋

模太郎様

こうした名子入百姓の申送りが数多く残されているが、芸州からのものが多く、所謂安芸者<sup>アキモノ</sup>はこのようにして作州へ入つて来たようである。

(55) 大岡忠成著「美作一覽記」岡山県立図書館所蔵大岡家文書

(56) 「勸農袖鑑」内「度々御解書」広島大学所蔵文書寛政七戊七月

一、持高拾石以上之もの者名子家来たり共本百姓ニ申付候間右之通村内ニ而取扱可申尤家来之分者其主人へハ是迄之通相心得可申候  
但以後拾石以上ニ持増候ものは又右之通相心得可申候

一、持高拾石以上之ものたり共以後拾石内ニ減石いたし候ものハ村内取扱名子ニ准其村長百姓之名子ニ可申付候

(57) 「三月切金預り質地證文之事」津山郷土館所蔵合金八両壹分式朱也 但来亥三月切利足此質物

真加部村田升金預り

質地主

与 之 介

文久二戌年十二月

御本村

菊右衛門様

こうした證文が非常に多く見られ、三月を切りとして田畑を質入れし、三月毎に證文を継ぎ足して行き、ついには田畑を取上げられてしまうのである。年限が切れた時は執心切と称して貸主が、質地主へ金を与えたようである。

(58) 「維新期の農業経営について」八七頁「手作・小作別貢租負担比率表」

(59) 湯原町史上巻「勝山藩目録」

(60) 「月堂見聞集」―「近世風俗見聞集」二巻所收一二頁

黒正蔵著「百姓一揆の研究」三六四頁

(61) 「勝山藩目録」

(62) 安政三丙辰年十二月「辰年御成簡辻目録」愛山所蔵 史料集

拾万三千三百三拾壹石四斗六升九合

(63) 馬場貞観著「老人伝聞録附録」津山温知会誌第五編所收

(64) 文中には申年とだけしか書かれていないが、前後の事情により、天保七年というより嘉永元年の方が正しいと考えられる。

(65) 「藩日記」慶応二年五月廿八日 史料集

(66) 「改政一乱記」巻一

(67) 矢吹正則著「美作略史」頁

元治元年六月十二日 津山藩置農兵藩、封内農民ノ兵役ニ堪ル者一百人ヲ拵テ隊伍ヲ編成ス、而テ中島半兵衛<sup>香々美中</sup>村ノ人土居源次郎<sup>田邑村</sup>ノ人植月熊次郎<sup>一方村</sup>近藤道之丞<sup>上河内</sup>ヲ以テ其隊長ト為

ス明治二年ニ至リテ之ヲ廢ス

(68) 矢吹正巳稿「作州土寇史」―山中騷擾―津山温知会誌 第拾五編

(69) 「藩日記」慶応二年十二月十七日 史料集

(70) 齊民は、將軍家齊の第十四子、津山藩主齊孝は世子慶倫を立てず、齊民を迎え藩主とした。

(71) 「美作贈位者列伝」―鞍懸寅二郎―津山温知会誌第四編

(72) 前掲書、「岡山県人物伝」岡山県内務部編「明治維新前美作志士列伝」津山温知会誌 第拾參編

「岡山県人名辞書」

(73) 井汲は入牢し慶応二年四月自殺、藤本は減禄、隠居申付けられ幽閉された、どちらも天誅組と関係があつたと云われている。

(74) 「松平慶倫侯建言書集」・「鞍懸吉寅上言集」津山温知会誌第拾五編

(75) 「津山藩領民騷擾城下侵入見聞録」

(76) 黒正蔵「百姓一揆年表」経済史研究 第十七巻 第三号

(77) 石井孝著「慶応二年の政治情勢」歴史評論 三十二頁

(78) 「大阪市史」第二巻 九四六―九四七頁

(79) 原平三・遠山茂樹共著「江戸時代後期一揆覚書」歴史学研究 第二二七号 三〇頁

(80) 安東与・藤本実共編「由良日正」―「強訴日記」―

(81) 「監屋文書」

(82) 「校補但馬考」二二〇頁

(83) 「島根県史」九の五七三

(84) 「商国農会報」九の三

(85) 「防長回天史」五下の一四四

「村内一揆過状控」

- (86) 「慶応二年の政治情勢」 十三頁
- (87) 「武州一揆について」 武蔵野地方史研究会  
歴史評論九五
- (88) 「武蔵打こわし史料」 第一集 武蔵国百姓一揆  
史料調査会編
- 「いづれも窮民之体ニ而山仕度農仕度ニ而」 九頁
- (89) 「征長・開港二件ニ付幕府へ上言書」 津山温知  
会誌 第拾五編
- (90) 小豆島へその後千俵下付された分を含む
- (91) 「藩日記」 慶応三年二月十一日
- (92) 同 日記 九月十五日
- (93) 富岡敬之・長光徳和共著「津山藩をゆるがした  
一夜」―作州改政一揆の研究― 八頁
- (94) 黒田は年寄で三百石、同じく海老原極人は三百  
七拾石、海老原修平は百四拾石で津山藩にあつて  
は重臣に属する。

## 史料

- 「改政一乱記」 全五巻 津山市南新座津山郷土  
館内 国政輝郎氏所蔵
- 「作州非人騒動記」 岡山大学「黒正文庫」所蔵
- 「郷輩騒動記」 津山郷土館所蔵
- 「菊畑文書」 勝田郡吉野村荒内西 菊畑千秋  
氏所蔵
- 「改政一揆関係者口書」 津山市南新座 矢吹家所蔵
- 「弓 斎 叢 書」 矢吹家文書
- 「孝女夢物語」 「改政一乱記統編」
- 仁重岡田定愛氏所蔵写し
- 「慶応二年津山藩民強訴一件手続書」 「大岡家文書」

## 文 献

- 岡山県立図書館所蔵
- 「福嶋家文書」 福嶋雄氏所蔵
- 「中島家文書」 香々美村「中島家文書」津山郷  
土館所蔵
- 「美作一覽記」 「大岡家文書」 岡山県立図書館
- 「苦田郡古川村史料」
- 「美 作 史 料」 第一集
- 「山中一揆調査史料」 山中一揆顕彰会
- 「津山藩日記」 津山市椿高下愛山所蔵
- 「地方郡代御用日記」 同所蔵
- 「郷中御条目」 津山郷土館所蔵
- 「津山藩大年寄月番日記」 津山郷土館所蔵
- 「地方日用記」 同館所蔵
- 羽仁 五郎 「幕末における社会経済状態・階級関  
係及び階級闘争」  
(日本資本主義発達史講座第四回)  
岩波書店
- 黒 正 巖 「封建社会における資本の存在形態」  
「百姓一揆の研究」
- 小野 武夫 「封建社会の統制と闘争」 改造社  
「農村社会史論講」
- 矢吹 正則 「作州百姓一揆叢書」
- 入交 好脩 「近世社会経済叢書」 十巻  
「津山藩治の沿革と農民一揆」  
(日本農民経済史研究)
- 原田 伴彦 「近世都市騷擾覚書」  
(日本封建都市研究所収)
- 関 順也 「幕末における農民一揆」  
(「社会経済史学」)
- 林 基 「百姓一揆の伝統」 新評論社
- 石井 孝 「慶応二年の政治情勢」  
(「歴史評論」 三四)
- 原山 茂樹 「江戸時代後期百姓一揆覚書」  
(「歴史学研究」 一二七号)
- 遠山 茂樹 「江戸時代後期百姓一揆覚書」  
(「歴史学研究」 一二七号)
- 堀江 英一 「世直し一揆の研究」  
「藩政改革の研究」 お茶の水書房  
「明治維新の社会構造」
- 歴史学研究会編 「明治維新史研究講座」  
第一巻―第四巻
- 谷口 澄夫 「近世村落構造に関する一考察」  
(「史学研究記念論叢」)
- 石田 寛 「津山藩における在方商業の発達」  
「近世末期における農民一揆の経済  
的基盤」 (岡山史学) 第一号
- 柴田 一 「近世高瀬舟楫の崩壊過程」  
(「岡山史学」 第二号)
- 大林 秀弥 「維新期の農業経営について」  
(「歴史評論」 九一)
- 山口 和雄 「明治前期経済の分析」  
(東京大学出版会)
- 鈴木 直二 「徳川時代の米穀配給組織」  
井上 清 「日本現代史I 明治維新」
- 遠山 茂樹 「明治維新」
- 内藤 正中 「尊攘運動豪農層」  
(「吉備地方史月報」 十五号)
- 富岡 敬三 「津山藩をゆるがした一夜」  
長光 徳和 「(吉備地方史月報」 六号)
- 山中一揆研究会 「山中一揆の問題点」  
(「吉備地方史月報」 十号)



津田 秀夫 「幕末期大阪周辺における農民闘争」

〔社会経済史学〕二二ノ四

津山温知会編 「津山温知会誌」 全十五卷

〔大阪市史〕

永山卯三郎編 「岡山県通史」

吉備文書研究会 「北条県史」

矢吹 正則 「美作略史」

日本農業発達史研究会編 「日本農業発達史」

〔旧北条県史〕 岡山県立図書館所蔵

〔苫田郡誌〕〔英田郡誌〕〔湯原町史〕

上巻

大岡家文書 「明治維新津山藩勤王事情」

岡山県内務部 「岡山県人物伝」

〔岡山県人名辞書〕

赤松 啓介 「一揆」―兵庫県百姓騒擾史―

庶民評論社

